

《大島風物図屏風》の鑑賞授業と藤井篠作《しだ図》のレプリカ制作について —リニューアル工事期間及びコロナ禍下での教育普及活動の実践—

文化財課市史資料調査員

美術館教育普及担当

稲垣 尚人

はじめに

令和2年4月から、令和4年度3月までの3年間、碧南市藤井達吉現代美術館はリニューアル工事に伴う休館にはいった。当初は、工事期間は1年半、2年後には開館の予定であった。しかし、コロナウイルスの流行によって工事すらできない状態になり、結果3年間の休館になった。会場が使えないためワークショップの会場も検討することになり、美術館学習は別の方法を模索することになった。開館当初から、市内の7小学校5年生児童と5中学校の1年生徒、約1,400人を対象に美術館学習を開催し、企画展の作品を分かりやすく説明しながら鑑賞する機会を得ていたが、美術館休館に伴い、本物の芸術作品に触れる機会が絶たれることになってしまった。豊かな情操を育む点では、マイナス面が多いが、授業として学校に赴き、鑑賞する力や絵から類推する力を育むことは、現物に触れないマイナス面を凌駕できる可能性もある。また、学校に積極的に出かけ、美術館との関係を密にしていくことは、子どもたちをはじめ先生たちにとってもよい刺激になるのではないか。令和2年から令和4年の3年間、美術館学習を学校に赴いて授業として行う中で子どもたちの鑑賞力を高められたのではないか。

また、コロナウイルスの流行は、経済の停滞や混乱を招いたが、その一方で企業や教育現場のリモート化を促進させ、会社や学校でのオフィスワークや授業を家庭とのオンラインやリモートワークで補完することが当たり前の状況になった。また、そのために学校では一人一台のタブレット端末(以後タブレットと表記)の普及が促進された。ある面で社会のOA化に拍車をかけたことも事実だった。

このように、社会的変化の大きい3年間の休館期間だったが、その中の教育普及活動の成果を、<1 美術館学習の授業について>と<2 棚尾小学校達吉クラブの出前授業>に絞って述べてみたい。

1. 学校に出向いての美術館学習《大島風物図屏風》の鑑賞授業について

(ア) 令和2年度から令和4年度の3年間の変化について

美術館の休館に伴い、令和2年の9月から11月にかけて市内小中学校12校をまわり、藤井達吉作《大島風物図屏風》の鑑賞授業を実施したことは、平成



写真1 藤井達吉作《大島風物図屏風》1916(大正5)年制作 碧南商工会議所蔵(表面)



写真2 藤井達吉作《大島風物図屏風》1916(大正5)年制作 碧南商工会議所蔵(裏面)

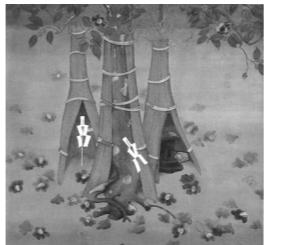


写真3 藤井達吉作《椿》1916(大正5)年頃制作 個人蔵

31年度・令和2年度研究紀要の碧南市藤井達吉現代美術館における美術教育の実践と成果について—美術鑑賞教材としての《大島風物図屏風》の位置づけと授業実践—に述べてある。令和2年度から令和4年度について、少しずつ授業の改良や準備物の変更を行っていたが、大きく変更した点は、

- ・《大島風物図屏風》のミニチュア模型に加えて、写真1、2の画像をA4判のラミネート印刷から、子ども用タブレットに電子データー送付し、授業に活用したこと。
- ・画像データーに《大島風物図屏風》に加えて、《椿》(写真3)を参考として加えたこと。
- ・鑑賞授業後に子どもたちに《大島風物図屏風》の解説(図1)を配布したこと。

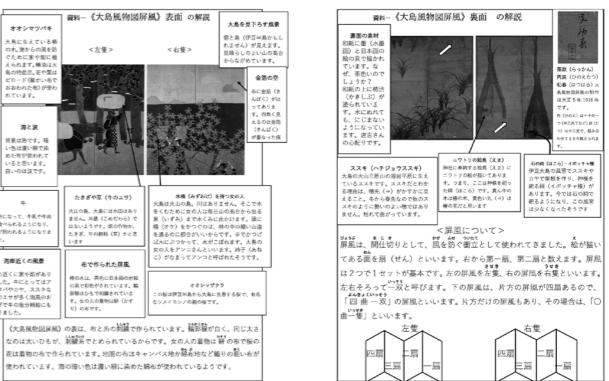


図1 解説《大島風物図屏風》(令和4年度作成)

の3点である。1点目は、A4の印刷物を裏表でラミネートして配布し、ミニチュア屏風の絵を補完するように制作した。子ども用のタブレットが普及したこと、画像をデーターで送付して拡大して見られるようになった。しかし、画像だけでは、立体物としての屏風の感覚が分からぬので、写真画像を貼った屏風のミニチュア模型と実物大の模型も併せて用意した。2点目は、令和2年の反省から椿の花がしっかり分かるようにと藤井達吉が《大島風物図屏風》と同時期に制作した《椿》の画像データーを参考作品として加えた。そして、3点目は、授業内の子どもたちの意見を出したままで授業を終えてしまうので、子どもたちに疑問点ばかりが残ってしまうことに配慮して、授業が終わった後にアンケート結果の送付とともに解説《大島風物図屏風》(図1)を子どもたちに渡すことにした。こうした授業内容や準備物の改善によって子どもたちが作品からみつける内容が多くなり、子どもたちからの指摘によって新たな疑問や発見が出てきた。この点について次項で詳しく述べていく。

(イ) 藤井達吉作《大島風物図屏風》の新たな発見

《大島風物図屏風》で描き表わされている絵の内容については、3年間、大島の産業や当時の生活状況を調べていく中で、前頁図1 解説《大島風物図屏風》(令和4年度作成)のように私なりの説明がつけられた。授業では子どもたちが様々な発言をして、絵の見方が深まっていくことが多かった。中でも、右隻表面の絵から、暗い色の部分が海であることが分かり、左隻表面の暗い部分と色が同じことから、左隻の背景は海であり、白く見える物は波であることを認識したときには、子どもたちから驚きの声が上がった。ただ、一時間の授業での話し合いでは、子どもたちの疑問は解決できないので、前頁の図1 解説《大島風物図屏風》を、後日配布することにした。

タブレットで画像を鑑賞することは、令和3年度から試験的に実施し始めた。しかし、当初は画像を「スカイメニュー」というタブレットソフトを使い子どもたち一人一人が画像ファイルを受け取って画像を開く方法で実施していたので、画像の解像度が低く、受け取った画像を拡大すると細かいところがぼやけて鮮明にならなかった。そこでマイクロソフトの「チームス」と呼ばれるデータ共有ソフトを使い、鑑賞の画像を共有する方法で実施すると、拡大しても画像が鮮明で、《大島風物図屏風》の裏面の落款や「丙辰初春」の文字もはっきりと読めた。《大島風物図屏風》表面の「椿」の花や裏面の「ハチジョウススキ」の穂も見つけることができた。しかも、私が気づかずにいた部分に子どもたちが気づき、教えられた事例もあった。その事例を2つ紹介したい。

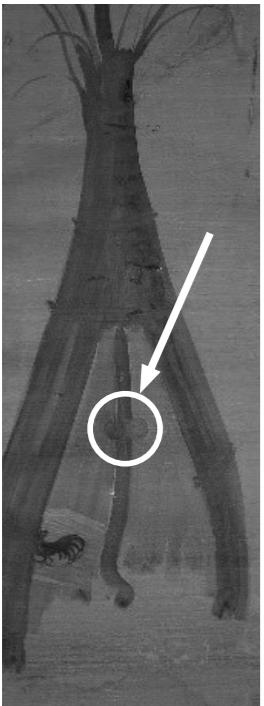


写真4 《大島風物図屏風》
左隻裏面 拡大写真

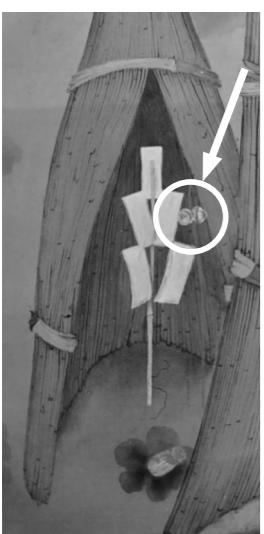


写真5 《椿》 拡大写真

(1) イボッチャに奉納された赤青二つの玉の正体

1つ目は、《大島風物図屏風》左隻裏面のイボッチャの中に描かれている青と赤二つの球の正体である。(写真4 《大島風物図屏風》左隻裏面 拡大写真)藤井達吉の別の作品《椿》にも、青と赤の球が登場する。(写真5 《椿》拡大写真)

タブレットで画像が拡大して見られるようになったことで、より詳しく作品の内容を発見でき、今まで気づかいでいた部分「赤と青の丸は何だろう」という疑問が授業中の意見発表で上がった。よく見ると球が合わさっており、手毬のような模様が描かれている。私はいろいろ調べ、神社に奉納する玉や鈴などいろいろと考えたが、最終的には「繭玉が奉納されているのかも知れない」という仮説にいきついた。

繭玉のことを調べてみると、豊穣祈願の飾り物で、花餅のように木の枝などに餅や団子を丸めて飾った風習が、養蚕の祈願も重なって繭に似た飾り物を木の枝や竹などにつけて、繭の成長を祈ったことが分かった。(資料1) また、明治時代になって、生糸が国の輸出品になると全国各地で桑の栽培と養蚕の振興が奨励されていったことも分かってきた。特に対岸の伊豆半島では、明治以

降養蚕が盛んになり、桑の栽培と養蚕が産業として成立していた。(資料2、資料3)

正月の飾り物の一つ。桑や赤芽柏(あかめがしわ)の枝に、繭のようにまるめた餅や団子を数多くつけ、小正月に飾るもの。その年の繭の収穫の多いことを祈って行なった。後には、葉のない柳や笹竹などの枝に、餅や菓子の玉をつけたり、七宝・宝船・千両箱・鯛・大福帳などをかたどった縁起物の飾りをつるしたりしたもの。 精選版 日本語大辞典 の「繭玉」の意味・読み・例文・類語

資料1 (コトバンク (<https://kotobank.jp/word/繭玉>) より転載)

特に垂山村は、春繭で飼育戸数の(田方郡下での)11.6パーセント、収穫高の12.2パーセント、収繭価額の12.8パーセントを占めていた。これは、文字通り郡下第一位の実績である。また、この時点の村の全戸数が1046戸なので、養蚕を収入源にしている農家の比重は、春繭で84パーセント、秋繭で68パーセントと非常に高い比率を示していた。ほとんどの農家が養蚕にかかりわりを持っていたのである。

資料2 (垂山村史 第12巻 第六章 大正時代の垂山村 「養蚕郡下の垂山村」より)

農業の副業として養蚕が行われるようになったのは、生糸の輸出が盛んになつた明治期からである。繭の値が下がる昭和初期まで、ほとんどの農家が桑畠を持ったり、畠のまわりに桑を植えたりして、養蚕を営んでいた。最盛期の大正11、2年頃には、繭一貫の値が11~13円にもなり、平均的な農家で200円から230円といったまとまった収入を得ることができた。当時一般的な農家が100円札を手にするのは、養蚕しかなかった。

資料3 (沼津市史 資料編 民俗 第三章生業 第一節農業 (七)養蚕 養蚕の時代 より)

伊豆大島の周辺では、桑の栽培がなされるのは、神津島に記録が残り、大島の養蚕については、ウィキペディアに下記の一文が残っている。(資料4) また、大島 波浮港の「甚の丸邸」の二階に養蚕の場所があったとされる。

大島では畠で大麦、里芋、大根、大豆などを植えていた。田がなかつたため近世前期には年貢は塩で納められた。また、後に茶やサツマイモなども栽培され、養蚕も行われた。元禄2年(1689年)には釜方村などで製塩された2,000俵以上の塩が納められ、代わりに246俵の扶持米が給付されている。

資料4 (Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/伊豆大島>)

熱海市の来宮神社の正月の縁起物は「繭玉」で、赤や白、黄色、青、黄など

の半球の玉が木の枝に飾られている。また、伊豆の国市伊豆長岡町で新春に飾られる「まゆ玉飾り」は竹に球が二つくついた繭のような形で、この風習が伊豆大島に伝わっていたとしても不思議ではない。竹や木の枝に丸い繭に似た玉が二つつけられ、五穀豊穣や養蚕振興を願ってイボッチャに奉納されたと考えられないだろうか。

(2) 右隻裏面のハチジョウススキの意味するものは

右隻裏面には、ハチジョウススキの群生が描かれている。左隻裏面には、イボッチャが描かれ、伊豆大島の信仰・風俗が描かれているが、右隻裏面は、一面に広がるハチジョウススキのみが描かれている。他の屏風の描き方に比べてハチジョウススキのみの淡泊な画面構成なのである。東中学校生徒のワークシートの感想(図2 ワークシートの一部)を読んで、そのことに気づいた。どうして、ススキだけを描いたのだろうか。

—ただ、私は右隻の裏の絵だけ何を伝えたいのか、何が隠されているのかを見つけることができませんでした。草がたくさん生えているので、夏も想像しましたが分かりません。(東中学校生徒の感想 一部抜粋)

<感想>
「一枚の絵の中には、鳥や天候、何をしていくのかなどを描かれていてすごいと思いつつ、見つけたのがとても楽しいです。よくみると、何が描かれていたのかがわからなくなっちゃった。たたかわいは、右隻の裏の絵を見たいのかへ、何かかくさないのかを見つけました。草がたくさん生えているので、夏も想像しましたが分かりません。」

図2 東中学校生徒の感想(ワークシートの一部)

<表面>	<表面>
左隻《海岸の風景》海、波、椿(防風林)	右隻《山からの眺望》雲、島、空、海 海岸
《人の生活》あんこ、牛の世話	傾斜のある地面 桜 《人の生活》あんこ 水くみの仕事
干し草の束	
<裏面>	<裏面>
左隻《人里の信仰》地神—イボッチャ、	右隻《山の信仰》ハチジョウススキ(三原山 の群生)
鶴の絵馬、繭玉、椿の花	三原山(火山)＝御神火

図3 《大島風物図屏風》左右、表裏の対の構造

左隻裏面のイボッチャが島の神様であるならば、ハチジョウススキの群生も神様に関わるものではないかと考え、「三原山」が神様であることを思い出した。三原山山頂付近には「三原神社」が祀られ、三原山は「御神火」と呼ばれる

火山である。つまり、次の図のような関係が成り立つと考える。前頁(図3)《大島風物図屏風》の構造は、左隻=海辺 右隻=山 表=島の生活 裏=島の信仰 という対で構成されている。鑑賞教材としてここまで深く考えられた作品は少ないように思う。特に近代の身近な生活にテーマを置く作品が多い中で、大切にしなくてはならない貴重な作品だといえる。

しかし、疑問はまだ残る。鶴の絵馬についてなぜ、絵馬の鶴が奉納されるかということである。昔から「鶴」は干支(酉)である他に、荒神社の使いで火や竈に関わりがあり、鶴が夜に鳴かないことから、子どもの夜泣き癒封じの祈願に鶴の絵馬を奉納する。《大島風物図屏風》の左隻裏面(写真2)では、鶴の絵馬とともに繭玉がイボッチャに奉納されているが、《椿》(写真3)では、御幣とともに繭玉が奉納され、もう一つのイボッチャには、石の祠の脇に舟の絵が描かれた絵馬が奉納されている。一つ一つの絵の意味については、今後の研究課題となるのかも知れない。

(ウ) 成果と実績(アンケートの集計からの考察)

令和4年度のアンケートの集計からは、小学校5年生担任全員から「よかったです」(100%)、5年生児童の91%が「楽しかった」という回答があり、中学校担任の92%から「よかったです」、生徒の90%が「楽しかった」と回答した。授業内容が理解できたかという点では、5年生児童では、62%が「よくわかった」中学1年生の64%が「よくわかった」という回答で、半数の子どもたちは楽しかったが、内容が少し難しかったということである。また、屏風づくりについて、小学生の67%が「かんたんだった」と回答し、ワークシートについては中学生の56%が「簡単だった」と回答した。この点についても、一時間の授業という制約の中で理解度を上げていくための工夫が必要だと反省した。

タブレットの使用について中学1年生の76%が「よくわかった」、「まあまあわかった」が22%で、使い方はよく慣れている様子だった。また、教師からの回答で「細かなところまで拡大でき、実物とはいかないが実感できた」「授業用の屏風とセットで鑑賞することにより実感を伴う鑑賞になった」「タブレットの活用はとても有効だった」という意見があった。生徒の回答にも「タブレットで詳しく見られ、気づけなかった細かい所に気づけた」という内容があった。

屏風の数え方については、どの屏風も「一双」であったことに納得がいかない様子で、「屏風の数え方が難しかった」「どれも一双なのは意外だった」「難しい数え方なので忘れてしまう」と感じている小学生が多かった。逆に中学生の多くは、「楽しかった」と回答し、その理由として「自分の思いつかなかった考えを友達から聞いて絵を見直すことができた」とことや「じっくり絵を見ると、いろいろなことが読み取れるのが面白かった」ことをあげている。教師からの

感想にも「謎解きゲームのように子どもたちが作品を見て、楽しんでいた」や「生徒の意見から見方が広がって面白かった」など、作品鑑賞の楽しみ方が伝わったように感じた。

以上のアンケート内容から考察して、これから美術館での鑑賞学習を再開するにあたっての意義を考えたい。まず、美術館鑑賞の時間は子どもたちにとってとても楽しい体験であり、集中して学習できるので、実物を鑑賞できる美術館学習は大いに意義がある。ただ、授業の反省から、制限時間内で鑑賞の時間とワークシートの記入の時間のバランスを考えないとワークシートを書く時間が足りなくなってしまい、結果学校側に負担をかけてしまうので、鑑賞のポイントなどの説明は簡潔にまとめ、自由に鑑賞できる時間を充分とすることが大切だ。そして、美術館学習でいちばん大切にしたいところは、

- ・新しい発見や思いもよらなかつた事実が制作などの作業や友達との意見交換によって、自力で獲得できること。
- ・一見何の意味か解らない絵の内容が、多様な見方や意見交換によって意外な事実が発見できること。
- ・上記の達成感を通じて、ものの見方を深める喜び、学びを知ること。

であろう。残念なことは、美術館学習では、友達との意見交換や制作などの作業を伴う時間的な余裕がとれないことである。残りは、各学校の鑑賞授業の充実に頼る以外にない。ただ、先生達のアンケートの中に「鑑賞の授業はこうすればいいんだ」「参考になった」「真似してやってみたい」という感想があり、鑑賞授業の方法を伝えられた点やタブレットに搭載しているマイクロソフトアプリ《チームズ》を活用すると、画像を手元で自在に拡大できるという方法が確立できしたことなど、3年間の授業の意義は大きかったように思う。

2. 藤井篠作《しだ図》のレプリカ制作

(ア) 棚尾小学校達吉クラブの活動と出前授業への経緯

棚尾小学校には、「達吉クラブ」というクラブ活動があり4年生から6年生20名の児童で構成されている。年6回のクラブ活動を通して、子どもたちは、棚尾小学校出身で碧南市の偉人である、藤井達吉の人柄に触れるとともに、母校の大先輩として尊敬し、その芸術の特長の一端を学習している。

達吉クラブはもともと「達吉翁ジュニア調査隊」(図4)という棚尾地区の子どもたちの自主活動が土台となっている。平成13年に発足した「達吉翁ジュニア調査隊」は、棚尾地区の人々の支援や協力を受けて、藤井達吉のことを学んできた。豊田市小原地区に出かけ、小原和紙の紙すき体験をしたり、瀬戸市での陶芸体験や臘顔染め体験をしたりするなど様々なことを学んできた。そして、



図4 達吉翁ジュニア調査隊マーク



写真6 藤井篠作《しだ図》 1933～34(昭和8～9)制作 棚尾小学校蔵

体験で学んだ内容を毎年8月の藤井達吉の命日に棚尾の妙福寺で行われる法要行事「鶴頭忌」で発表してきた。

令和2年度のクラブ活動に棚尾小学校より出前授業の依頼を受け、達吉クラブの講師として指導にあたることになった。棚尾小学校長や顧問の先生から、長年いろいろな活動をしてきた達吉クラブは紙すき、陶芸、染色など多くの体験を行い、現在活動内容が手詰まりの状態であり、藤井達吉にかかわる新しいクラブ活動内容がほしいと依頼された。そこで、来賓玄関に飾られている藤井篠作《しだ図》(写真6)が90年も経って色褪せ、子どもたちもあまり気にもかけずに通り過ぎていることを、棚尾小学校に訪れるたびに気になっていたことを話し、《しだ図》のことを子どもたちと一緒に調べ、できれば同じような技法でレプリカをつくってみてはどうかと提案した。

さっそく、「達吉クラブ」の子どもたちと来賓玄関の《しだ図》を鑑賞し、描かれている絵について疑問点を出していった。

(イ) 《しだ図》の謎

子どもたちから出された疑問や気づいた点は次の6つであった。

- ① どうして《しだ図》が棚尾小学校に飾られているのだろう。
- ② 作者の「藤井篠」とは、誰だろう。
- ③ 長い間、飾られて色褪せてきている。(元の色はどんな色だったのだろう)
- ④ いくつかの模様があるが、どんな意味があるのだろう。
- ⑤ 布でできているが、糸で縫っているか貼ってあるか分からない。
- ⑥ 何かの植物が描かれているが、「しだ」はどれだろう。

②については、「ふじい すず」という名前で、藤井達吉の姉であること。棚尾小学校の卒業生であることを子どもたちに伝えた。しかし、他の疑問点については、子どもたちと一緒に解決していくことにした。

(ウ) 《しだ図》に描かれている植物名について

＜ヤグルマソウ＞

《しだ図》の上半分を占めている植物は、藤井達吉作《山草図》二曲一隻 岡崎市美術館蔵(写真7)にも描かれている。木の葉の特徴から、＜ヤグルマソウ＞(図5 出典 牧野富太郎著「原色牧野植物大図鑑」169頁 より)ではないかと推論した。

ただ、中央にある丸いブドウの房のようなものは、ヤグルマソウの白い花とは異なっている。早急にヤグルマソウとは断定できないと思った。図鑑を調べたりインターネットの画像を検索して、丸い房のような物が花芽であることが



写真7 藤井達吉作《山草図》二曲一隻 岡崎市美術館蔵
—図録 藤井達吉の全貌— より転載



写真8 <ヤグルマソウ> 花芽
著者撮影



写真9 <した図> 拡大写真

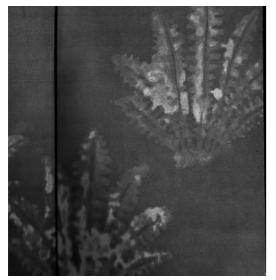


写真10 藤井達吉著書「美術工藝の手ほどき」見返しの部分



写真11 <した図> 拡大写真

分かった。(写真8)

私が、実際に<ヤグルマソウ>の苗を購入し、育ててみたところ、芽生えの早いうちから葉とともに花芽が成長し、やがて房が広がって白い花が咲いた。「達吉クラブ」の子どもたちも図鑑から<ヤグルマソウ>を導き出し、スケッチにしてまとめていった。



506. ヤグルマソウ (A. Gray)
Rodgersia podophylla A. Gray
北海道・本州・および朝鮮に分布し、低山帯から亜高山帯の日向をむく林内や林縁にはえ、外國では被賞用に栽培している多年草。高さ1m位。葉は長い柄があり大形のもので50cm位。花は初夏、花弁はない。和名矢張草は葉の形が猪の口の跡のとき、體のよりといっしょに立てる矢車に似て立てるところからついた。種小名は有柄の意の意。

図5 「原色牧野植物大図鑑」169頁 ヤグルマソウ

<クサソテツ>

『した図』の<ヤグルマソウ>の根元にある岩のような形の布に描かれた模様(写真9)は、藤井達吉がよく取り上げる植物で、《山草図》(前頁 写真7)にも描かれている。また、昭和5年に出版された著書「美術工藝の手ほどき」の見返し(写真10)にこの模様がそのまま使われている。「達吉クラブ」の子どもたちも、私と同じように<イヌワラビ>和名クサソテツが描かれていると結論づけた。詳細は、図6 牧野富太郎著「原色牧野植物大図鑑」830頁を参考にしてほしい。



図6 <クサソテツ>「原色牧野植物大図鑑」830頁

<コバンソウ>

『した図』の根元にあるもう一つの右端にある岩のような形の布に描かれた模様(写真11)は、小判型の枠に描かれているため、「達吉クラブ」の子どもたちは、<コバンソウ>または、<ヒメコバンソウ>(図7)ではないかと推論した。コバンソウはイネ科、コバンソウ属、別名タワラムギと呼ばれているが、明治時代に鑑賞用として海外から持ち込まれ、移植されるうちに野生化したものだ。

1939. ヒメコバンソウ [コバンソウ属] (スズガヤ)

Briiza minor L.
ヨーロッパ原産。原野や道ばたにはえ繁殖する1年草。全体に緑色。茎は直立し生え。高さ30~40cm。葉は互生。長さ6~14cmで幅5~10mm。秋から茎とともに無毛。花は初夏。茎の頂に長さ10cm位の円錐花序に、特異な形をした多数の小穂を糸状の分枝につけた。和名小羽草。種小名の意もその小穂による。



図7 <ヒメコバンソウ> 出典「原色牧野植物大図鑑」647頁

しかし、外側の小判型の枠を外してみると、花が花弁を下向きに咲くところや葉が細長く双曲線状に広がって伸びていく模様から、<コオニユリ>かくゼンティカ(ニッコウキスゲ)のような花や葉の形に思える。(図8、図9)藤井達吉の《山草図》と同様で、藤井篠が<ヤグルマソウ>や<クサソテツ>のような山の中に自生する植物を選んだとするならば、ユリやゼンティカ(ニッコウキスゲ)などの山間部に自生する植物を選んでいると思う。藤井達吉は植物をよく観察し、その特徴を捉えて図案化しているが、図案化されすぎていてために判明のつかない場合もある。



2213. コオニユリ (原色800)

2213. コオニユリ (ユリ属)
(スズラン)

Lilium candidum L.

本州・四国・九州・および朝鮮、中国東北部、朝鮮半島に分布する多年草。葉は束生。花は1日咲き。花の下に1枚葉がある。花は夏から秋。径9cm位。上向きに開き1日咲き。花の下に1枚葉がある。古い花の茎の間から花を出すことがある。庭庭では栽培し、花を食用にする。和名は海滨にはえるカンゾウ。種小名は海岸性。



2195. ハマカンゾウ (ワスレグサ属)

Hemerocallis littorea Makino

本州・四国・九州・および朝鮮、中国東北部、朝鮮、中国東北部、東シベリアに分布。山地の草原に群生する多年草。高さ30cm位。根は赤褐色。葉は2列に葉身に出る。葉の先端は鋸歯状で細い葉脈は網状につく。葉の長さ1.5m、葉幅が狭い。葉と花を一緒に咲かせない。花は夏から秋。径7cm位。花は1日咲き。花の下に1枚葉がある。花は黄色。花を食用にする。和名は海滨にはえるカンゾウ。種小名は海岸性。



2196. ゼンティカ (ワスレグサ属)

Hemerocallis middendorffii Traut. et Mey.

本州中部地方以北・北海道、および南千島、サハリン、朝鮮、中国東北部、東シベリアに分布。山地の草原に群生する多年草。高さ30cm位。根は赤褐色。葉は2列に葉身に出る。葉の先端は鋸歯状で細い葉脈は網状につく。葉の長さ70cm位では枯れる。花は夏から秋。径9cm位。上向きに開き1日咲き。花の下に1枚葉がある。古い花の茎の間から花を出すことがある。庭庭では栽培し、花を食用にする。和名は海滨にはえるカンゾウ。種小名は海岸性。

花に短柄があるものを特にニッコウキスゲという。



2195. ハマカンゾウ (ワスレグサ属)

Hemerocallis littorea Makino

本州・四国・九州・および朝鮮、中国東北部、朝鮮半島に分布。葉は束生。花は1日咲き。花の下に1枚葉がある。花は夏から秋。径9cm位。上向きに開き1日咲き。花の下に1枚葉がある。古い花の茎の間から花を出すことがある。庭庭では栽培し、花を食用にする。和名は海滨にはえるカンゾウ。種小名は海岸性。

2196. ゼンティカ (ワスレグサ属)

Hemerocallis middendorffii Traut. et Mey.

本州中部地方以北・北海道、および南千島、サハリン、朝鮮、中国東北部、東シベリアに分布。山地の草原に群生する多年草。高さ30cm位。根は赤褐色。葉は2列に葉身に出る。葉の先端は鋸歯状で細い葉脈は網状につく。葉の長さ70cm位では枯れる。花は夏から秋。径9cm位。上向きに開き1日咲き。花の下に1枚葉がある。古い花の茎の間から花を出すことがある。庭庭では栽培し、花を食用にする。和名は海滨にはえるカンゾウ。種小名は海岸性。

花に短柄があるものを特にニッコウキスゲという。

図8 <コオニユリ> 「原色
牧野植物大辞典」738頁

研究紀要 | 《大島風物図屏風》の鑑賞授業と藤井篠作《した図》のレプリカ制作について

研究紀要 | 《大島風物図屏風》の鑑賞授業と藤井篠作《した図》のレプリカ制作について

この他にも、描かれている模様は、瑞雲文(写真12)や鳥(写真13)、そして判明できない模様(写真14)などが見つかった。これらの模様も、《しだ図》の制作意図に大きく関わっていると考える。詳細については、もう少し研究が必要だ。



写真15 《しだ図》左上部分の拡大図



写真16 《しだ図》左中部分の拡大図



写真17 15に線描を施したもの



写真18 16に線描を施したもの



写真19 《しだ図》上部拡大写真

(エ) なぜ《しだ図》と命名されたのか

作品上半分の模様がくヤグルマソウであると判明したので、《しだ図》と命名されたことが新たな疑問になった。くヤグルマソウが画面の中央の大部分を占めているのに《しだ図》では説明がつかないからである。理由は2つ考えられる。一つは、藤井篠氏が名前を告げずに寄贈し、学校側で命名したため、植物名にずれが生じたこと。もう一つは、実際にしだが周囲一面に描かれていって、《しだ図》に相応しい作品であったが、色褪せて、元の模様が見えない状態になり《しだ図》からほど遠い作品になってしまったということである。私は、後者の推論の可能性が高いと考えている。その論拠は、《しだ図》の拡大写真(写真15、写真16)であるが、写真15は《しだ図》の左上部、写真16は左下部である。そこに色褪せて、消えかかっている模様が見て取れる。(写真17)この模様は藤井達吉が《日光(夜、昼、朝)》の朝や《草の一生》などに見られる「氣」の表現が金泥で描かれた模様ではないか。そして、写真16では、かすかに金泥の跡ではないかと思うのだが岩の周りに草の模様が描かれていたようと思うのである。(写真18)いずれにしても、ずいぶん色褪せているため、元の色、元の模様がどんなものであったのか、赤外線写真撮影などのしっかりした調査が必要である。

(オ) レプリカ制作で明らかになったこと

《しだ図》に描かれている植物の調査が済み、いよいよ「達吉クラブ」の子どもたちと一緒にレプリカ作りが始まった。まず、《しだ図》を壁から降ろして、額の上から、トレーシングペーパーをかけて、《しだ図》を写し取る作業を行った。そしてトレースした絵を元に、新しい布に模様を写し取っていった。そして、布を染めるなどの行程に移っていった。《しだ図》を見て、私なりに考えた制作技法の主なものは、次のものであると考えている。

(1) 膜纈染めで染め上げた布を岩の形に切り抜き、板にはりつける。

(写真9、11、14)

(2) 布に型押しした染料や絵の具などを馴染ませ定着させた布を切り抜き板にはりつける。

(写真12)

(3) 染色した布に金泥や岩絵の具などで描き込む。 (写真13、15、16)

(4) 縮れ糸(縮緬を解したもの)を束にして布に貼る。 (写真19)

このように、染色を中心に様々な技法で、《しだ図》が制作されていったことを「達吉クラブ」の子どもたちと追体験していった。

(1) 膜纈染めの方法(凸版を使った技法)

藤井達吉の膜纈染めの手法は、凸版(木版やイモ版)による型押しで行ったもので、その手本は正倉院御物(《羊木膜纈屏風》《鸚鵡膜纈屏風》《象木膜纈屏風》など)の膜纈技術を研究し、《膜纈花鳥図壁掛》《膜纈海草文壁掛》などを仕上げている。木版に熱で溶かしたロウをつけてスタンプするようにして布にロウを滲ませて防染し、染めるので、同じ模様が連続して現れる。子どもたちは木版を彫刻刀で彫って作るところから体験してもらった。(写真20)模様の版をいくつか作り、熱したロウをつけて、布に版押しする体験も行った。ロウの量や冷えて固まる状態で、模様のうつり方が大きく変わってくることが体験できた。(写真21)

また、大きな布の染色については、のりの型染めを行い、刷毛塗りで染色していった。(写真22、23)染め付けについては、膜纈した布を合成染料に一日つけ込み、アイロンがけで脱膜した。最初は、学校で全ての行程を行い、子どもたちに全行程を体験してもらおうと計画していた。しかし、コロナ禍で学校に出かけていくことが難しい状態が続いた。そこで、時間のかかる染め付けなどの行程は美術館で進め、子どもたちには出来上がった作品を見せ、進行状況を知らせた。

(2) 布に型押しした絵の具などを馴染ませ定着させる方法

瑞雲文(写真12)や鳥(写真13)を見ると木版などで型押しして染料をつけているか、絵の具などを木版につけ布に馴染ませているようだ。型押ししている点は、(写真12)を見れば分かるように、同じ形が繰り返されているからである。しかし、(写真13)の左は、染料またはきめの細かい顔料で、右の白い部分は、赤い顔料の上に雲母^{きらら}が塗られているようだ。また、(写真24)の瑞雲文には、赤い顔料の上に金泥が施されている。このように、型押しと判断されるが、細かな技法については今後の研究が必要かと思う。

(3) 縮れ糸(縮緬を解したもの)を束にして布に貼る方法(ヤグルマソウの表現)

(写真19)や(写真24)を見ると、くヤグルマソウの部分の糸は縮れており、下の布に膠か糊などの接着剤で貼り付けているように思われる。刺繡ではない。縮れた糸は縮緬を解したものを丁寧にはりつけていたものだと考えられる。縮緬の入手や糸を解す方法も見つからないので、研究不足のままで制作するよりは、刺繡でレプリカを作る方がオリジナルの雰囲気を壊さないだろうと



写真20 子どもたちによる木版作りの様子



写真21 子どもたちによる膜纈染め体験



写真22 のり置きの体験



写真23 刷毛染めの体験



写真24 瑞雲文(再掲)



写真24 瑞雲文

考え、刺繡で修復することにした。

(カ) 完成に3年かかったレプリカ制作

令和2年から始めた《しだ図》の研究と制作は、3年が過ぎた令和4年度に完成した。コロナウイルスの感染拡大防止のため、クラブが何度も中止になつた。令和2年から3年にかけて制作を進め、令和3年12月には、ヤグルマソウの刺繡を残すまでになつた。ところが、またコロナウイルス感染拡大のためクラブ活動が中止になり、研究や制作に関わった子どもたちは卒業や年度替わりで入れ替わつてしまつた。令和4年度のクラブ活動は、臘筆染めやのり置き、刷毛塗りなどの染色体験を知らない子どもたちでスタートした。刺繡の作業は30名のクラブ員で一齊に活動するわけにいかず、今までの研究をまとめしていくグループと刺繡を完成させるグループに分けて活動を行つた。また、刺繡についてはクラブ活動の時間以外でも制作を続けていた。指導が難しかつたのは、新しいクラブ員に《しだ図レプリカ》制作を一から始め、植物調べから臘筆染め体験をやってもらうわけにはいかず、子どもたちの意欲をどのようにして保つていくかにあつた。いろいろと困難はあつたが、令和4年2月に《しだ図レプリカ》(写真25)が完成した。



写真25 《しだ図レプリカ》

(キ) 棚尾小学校に《しだ図》が存在する理由

《しだ図》の裏面には、昭和9年2月1日 藤井達吉寄贈とあり、棚尾小学校に寄贈された事実が判明した。実は、寄贈の理由は、前年に棚尾小学校に起きた火災だった。

(1) 棚尾小学校校舎火災の事件

棚尾尋常小学校第一校舎が前年の昭和8年(1933年)2月2日に火災に遭い、全焼した。棚尾小学校学校沿革史には次のように記述されている。

昭和八年二月二日 午前二時半トモ思フ頃 第一校舎南端ヨリ出火ス 之ガ為 玄関 職員室 奉安殿 応接室 宿直室 小使室 其ノ備品重要重類ノ全部ヲ焼失ス 幸ニ御影 勅語贋本ハ 宿直岩月信蔵ニヨリ無事郷社八柱神社ニ奉還セラレ 本日午后四時更ニ当町役場ニ奉還ス 小学校児童 職員 青年訓練所生徒 女子青年団員 公職者 町民一般奉宰ス。

(棚尾小学校沿革史の抜粋 出典 棚尾小学校100年誌 71頁より)

当時の町長、永井治郎平氏の新校舎落成の式辞原稿(写真26)には、校舎は何者かが窃盗の為に放火、折からの強風で校舎が全焼したことや翌日には町民が総出で校舎の後片付けをし、4月には地鎮祭を行い、新校舎建設に動き出している。当時の棚尾町の迅速な復旧対応がうかがえる。また、校舎の再建のた



写真26 新校舎落成の式辞 棚尾町長 永井治郎平 その1



写真27 新校舎落成の式辞 棚尾町長 永井治郎平 その2

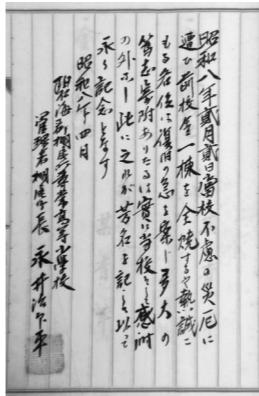


写真28 新校舎建設のための寄付台帳表紙



写真29 棚尾尋常小学校新校舎全景

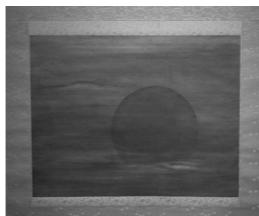


写真30 藤井達吉作 《日の出》 棚尾小学校蔵

めに、棚尾小学校の児童、卒業生、教員、地区の神社、寺、企業、店主など様々な人々が、金銭、図書、机、椅子、実験道具、カーテンなどを寄付したことから分かってきた。新しくできた校舎(写真29)は、火災後に再建されたこともあり、華美を避け機能的に作られていた。また、焼け残った校舎も老朽化しており、一部土台を新しく取り替えるなどした。そして、校舎建設の間は、町役場の議事堂を教室にし、学級編成をするなど、厳しい環境の中でも子どもたちが勉学に励めるように緊急措置が執られ、できあがった教室から順次活用するなどの苦心も祝辞原稿から読み取れた。(前頁写真27)

(ク) 解明されない疑問

藤井篠の《しだ図》とともに藤井達吉の掛け軸《日の出》(写真30)が棚尾小学校に寄贈されている。しかし、前述の寄付台帳に《しだ図》と《日の出》は記載されていない。額装された《富士山》や掛け軸、大花瓶、大観の衝立などの寄贈記録はあっても、藤井達吉、藤井篠、《日の出》《しだ図》は見当たらなかった。昭和九年二月一日の新校舎落成の期日に併せて寄贈された《しだ図》だが、寄付台帳に記録がないことは疑問が残る。

3. 成果と課題

美術館のリニューアル工事期間中で、その間にコロナウイルスの流行という大変な時期だった。しかし、美術館学習を市内小中学校に出向いて授業を行う形で実施したことや棚尾小学校に出前授業として《しだ図レプリカ》を完成させたことは、地域の子どもたちの心を豊かにし、郷土愛を高めることに少しは貢献できたかも知れない。また、それ以上に私自身が《大島風物図屏風》と《しだ図》の2作品から多くのことを教えられ、制作技術や作品構想の奥深さを学ぶきっかけになった。自身の浅学からたくさんの疑問が浮かび上がったものの、仮説のみで、なにも解明できなかつたことがいちばんの課題である。今後もこの研究を継続したいと考えている。

<出典>

- 資料1 コトバンク 「蘭玉」 コトバンク (<https://kotobank.jp/word/蘭玉>)
精選版 日本語大辞典 の「蘭玉」の意味・読み。例文・類語
- 資料2 『垂山町史 第12巻 通史3 近現代』 1997年 刊行 著作 垂山町史刊行委員会
第六章 大正時代の垂山村 「養蚕郡下の垂山村」
- 資料3 『沼津市史 資料編 民俗』 1997年刊行
著作 沼津市史編纂委員会 沼津市教育委員会

- 資料4 ウィキペディア 「伊豆大島」
(Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/伊豆大島>)
- 写真7 『藤井達吉の全貌－野に咲く工芸・街を見る絵画』展 図録 平成25年刊行
企画構成 宇都宮美術館 岡崎市美術博物館 渋谷区立松濤美術館
発行(株)キュレーターズ
- 図5～図9
『原色牧野植物大図鑑』 昭和57年5月20日刊行
著者 牧野富太郎 株式会社 北隆館
- 写真11 『美術工芸の手ほどき』 昭和5年1月刊行
著者 藤井達吉 発行 博文館
- 資料5、写真29
『棚尾小学校100年誌』 昭和49年3月3日発行
編集：棚尾小学校沿革史編集委員会
- 写真26、27
棚尾町長 棚尾尋常小学校校舎落成式式辞 碧南市 藏
- 写真28 棚尾尋常小学校校舎再建のための寄付台帳 碧南市 藏